

EMT981 再生系の再構成(22)

—ハイドンを聴く(13)—

1. はじめに

前報(3)において EMT981 から TruPhase を経て 300B アンプまでのバランス伝送が実現した機会に、手持ちの CD を聴き直していくことにしました。今回も、しばらく聴いていないハイドンの作品を聴いていきます。

2. EMT981 の試聴方法

EMT981 の再生では、前報(7)と同様に前報(2)の再生ルートとします。

EMT981(*)→TruPhase→.300B

* : GPS-777 より CCD-6 経由でクロック入力

古い録音で定位などに違和感が感じられるときは TruPhase で位相を反転します。

再生する CD はハイドンの交響曲です。

EMI TOCE-13121

ハイドン 交響曲第 88 番<V 字>

交響曲第 92 番<オックスフォード>

オットー・クレンペラー指揮フィルハーモニア

EMI TOCE-13141

ハイドン 交響曲第 94 番<驚愕>

交響曲第 95 番

交響曲第 97 番

ジェフリー・テイト指揮イギリス室内管弦楽団

3. EMT981 の試聴結果

クレンペラー指揮フィルハーモニア盤は、1964 年の録音で、音質は緻密さにかけてますが、クレンペラーの指揮らしく、勢いのある演奏です。録音が古いということから TruPhase で位相反転させますと、定位が向上します。

テイト指揮イギリス室内管弦楽団盤は、1991 年の録音で、歯切れよく爽やかな演奏です。交響曲第 95 番の第 3 楽章のメヌエットでのヴァイオリンとチェロのソロなどの質感も鮮やかに捉えられています。

4. まとめ

クロック入力した EMT981 からのバランス接続の効果で、1964 年の録音でも 1991 年の録音でも、それぞれの演奏のニュアンスが捉えられます。

以上